

---

# 背中を見つめて

カドクラ

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

背中を見つめて

### 【コード】

N2083D

### 【作者名】

カドクラ

### 【あらすじ】

恋愛物です。またまた王道ネタです。べたべたー。

入学式。

体育館の外では何本もの桜の木が、私達を祝福するように満天に咲く。ピンクの花弁を見せてくれる。しかしそれだけでは足りないように、彼等は桃色の花びらを柔らかな春の風に乗せ、整列する私達に直接お祝いを言いに来た。肩に着いた桜の花びらを見て、なんとなくそう思った。

私は花びらを払うことなく、そのまま前を向く。最前列なので、代表で壇上に立つ男子の背中がよく見える。

前からは校長先生、後ろからは全新生の視線を独り占めにした彼は、紺色の真新しいブレザーの背中を誇らしげにぴんと伸ばし、新人生誓いの言葉を読み上げていく。だけど、そんな自信のある背中とは裏腹に彼の声はどこか恥ずかしそうで、緊張からたまに裏返ったりもしていた。

私はそれがなんだかとても可笑しくて、思わず吹き出してしまいうんざりになり慌てて俯く。

しばらくして、笑いが落ち着いてきた頃には誓いの言葉は終わっていた。壇上には、微笑みながら私達を眺めている校長先生がいるだけで彼の姿は見当たらない。気になって慌てて周りを見回せば、すぐ後ろに列へ戻ろうとする彼の背中があった。

うなだれるように前のめりになった、哀愁漂う彼の後ろ姿。それは早足でどんどん遠ざかっていく。無理をしていたことが見て取れる背中に、再び笑いが込み上げてくる。

春風が再び桜からの入学祝を体育館の中に運んできて、彼の丸まった背中にも一枚付いた。

入学式が終わり、これから一年間お世話になる教室に入った。きれいに並べられた四十個の机。苗字が、あ、から始まる私の席

は、体育館の時と同じように必然的に前列になる。

私は席に座ると、すぐに彼を探した。壇上が上がっていた彼。べつに一目惚れしたというわけではない。だけど、背中しか見ることが出来なかった彼の顔を、一度でいいから見てみたいと思ったのだ。

しかし期待とは裏腹に、教室に彼の姿はない。どうやらクラスが違おうようだ。

込み上げてきた溜め息をそのまま吐き出し、机に突っ伏してみる。肩にはしぶとく桜の花びらが付いていて、彼の花びらを付けた丸まった背中を思い出した。

担任の先生の自己紹介やら、初日恒例の行事をテンションの低いまま終え、私は学校を後にした。

今日から電車通学になったので、歩いて十分くらいのところにある最寄りの駅へと向かう。初日なので親に送ってもらう人が多く、歩いているのは私だけだった。

三年間通ることになるであろう道には桜の木が沢山植えられていて、地面には柔らかそうな桜のクッションが転がっている。上を見てみれば、いつもはピンクな桜の木が、日の光を浴びて白く輝いていた。

そんな景色を見ていたら低かったテンションも少し上がり、私は清々しい気分で歩いていく。

上を向いたまま綺麗な景色を眺めて歩いていると、爪先になにかが当たった。名残惜しいが、私はゆっくりと視線を落とす。

前には紺色の大きな塊　　彼がいた。

驚いて思わず声が漏れた。しかし彼は気にする様子もなく、体育座りのような体勢で何かを探し続けている。

前に回り込んで顔を見ようと思ったが、蹴ってしまったようなのでとりあえず謝った。すると彼は、背を向けたまま軽く頷くだけ。何を探しているか尋ねると、やっぱり彼は振り向くことなく「コン

タクト」と言うだけだった。

探すのを手伝おうと思ひ、彼の隣に座ろうとする。これなら顔を見ることも出来るはず。しかし、彼はすぐにそっぽを向いてしまい、顔を見れない。話をしてみても、「うん」とか「違う」とか単語でしか返事が返ってこないで、会話が続かない。

気まずい空気と顔を見たいという好奇心に必死に耐え、彼のコンタクトを探し続けた。

結局、彼は自分でコンタクトを見つけ、私にお礼を言い去って行く。そんな彼も電車通学のように、駅の方角に歩いている。相変わらず彼の背中だけを見ながら、私も駅へと向かった。

数日後。

まだ彼の顔を見れてはいないが、新しい友達も出来て、学校にも慣れ始めて来た。

とは言ったものの、やっぱり朝は眠い。毎朝眠すぎて友達と話す余裕なんてないので、電車は基本的に一人で乗るようにしている。

降りる駅までの二十分間、いつも入って向かい側のドアに張り付き、しばしの睡眠をとる。勿論、寝顔を見られるのは恥ずかしいのでドアの方を向いている。

今日も電車に乗ると、自分の定位置へと向かった。

寝ようと思ったとき、ポケットに入った携帯が振動する。確認してみれば、くだらない用件のメールが入ってきていて、私は思わず溜め息を付いた。本当は無視したかったのだが、返信しないと後々面倒臭いので一応返信のメールを打つ。女子の人間関係は本当にかつたるいのである。

せめてメールのやり取りが早く終わってくれることを祈っていたのだが、十分たった今でも終わっていない。始めは空いていた車内も人が増えてきた。耐えられなくなって、私は正直に「眠いから寝る」と送り、重いまぶたを降ろす。周りにつるさい学生もいないので、よく寝れそうだ。

いい感じに夢と現実の世界を行き来し始めた頃、太股に生暖かいものが当たり私は起こされる。

気持ち悪いなと思ったが、ただ当たってしまっただけだろうし、とても眠かったのであまり気にせず再び目を閉じた。

しかし、また直ぐに起こされる。しかも今度は当たったのではなく、太股を撫で回され、全身に蛇が這うような悪寒が走った。

痴漢だ。

そう思った途端、凄く怖くなった。助けを呼ぼうとしても、声が出なくなっていた。

いつも友達とバカ騒ぎしている時はあんなに大きな声が出るのに、声が出ない。いつも、痴漢に遭ったらぶん殴ってやるなんて思っていたのに、体が石像のように固まって動かない。

痴漢の手はゆっくりと上がって来て、お尻を触り出した。

気持ち悪くて、吐いてしまいそうになる。

だけど、痴漢の手は止まらない。私は何も出来ない。ただ降りる駅に着くのを待つだけ。ただ痴漢が早く降りるのを待つだけ。

ポケットに入った携帯が震える。友達と一緒にいなかったことを初めて後悔した。

そんな時、後ろから小さな悲鳴が上がる。それと同時に痴漢の手は止まっていた。

恐る恐る後を見てみると、額いっぱい汗を浮かべて、顔を真っ青に染めてサラリーマン風の男がいた。そして、その男と私の間には、見覚えのある背中があった。

入学式の時から見えていた紺色の背中はとても大きくて、とてもかっこよくて、とても安心して、私はいつの間にか泣いていた。そして、思わず抱き着いてしまった。

ブレザーはまだ少し硬いけど、彼の体温はしっかりと伝わってきた。本当に優しく温かい、彼の背中。ゴツゴツとした男性の背中だった。

安心して、徐々に平常心を取り戻していき、今更ながら自分が恥

ずかしいことをしていることに気付く。きっと彼も、突然抱き着かれて困っているに違いない。

私は慌てて離れるが、電車が揺れてふらつき、再び抱き着いてしまふ。

たぶん神様が、抱き着いたまままでいると言っているのだろう。そう思い、私は神様の言う通りに、電車を降りるまですっと彼の背中にしがみついていた。

あの時から、私は彼と仲良くなった。

痴漢が怖いという理由で毎朝電車と一緒に乗っているし、話せば単語以外の言葉も返してくれるようになった。そのおかげで昔のことや家族のこと、趣味や携帯の番号まで、彼に関することをいろいろ知った。

だけど、いまだに顔が見れていない。

見れるチャンスがなかったわけではない、一杯あった。それなのに見れていない理由は私にある。

彼のそばにいと、私の顔が床を見たまま上がらなくなってしまった。

最近は一緒にいただけで、壊れるのではないかと思うくらい心臓が高鳴るのに、顔を上げようとするともっと胸が高鳴ってして体が破裂してしまいそうだ。

だけど、嫌な気はしない。むしろ彼と一緒にいるのはとても心地よかった。

とても安心するし、楽しいし、入学式るときはなかった彼への感情が沢山生まれた。

背中を見つめて

二人で歩くようになった、駅から学校までの道のり。  
いつも私は、彼の少し後ろを歩く。  
大好きな彼の背中を見ながら。

背中を見つめて

(後書き)

背中を見つめて

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

### PDF小説ネット発足にあたって

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。

出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2083d/>

---

背中を見つめて

2009年3月24日09時37分発行